



酒田市 鳥海山の紅葉と鶴間池

まだ見ぬ庄内の 秋を探しに

 庄内銀行

Cradle 9 「クレードル」 出羽庄内地域文化情報誌

2018 September/October
平成30年9月1日発行(毎月奇数月発行)第9巻1号(通巻49号)

発行 / Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15(株)会社 出羽庄内地域デザイン
制作 / Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3「コアック」ビル1階3号室 電話0234(41)0012



美しくつかしい、日本をのせて。

Cradle

特集
庄内のぼんどり
庄内憧憬
紺野美沙子
俳優

「クレードル」出羽庄内地域文化情報誌

9 2018 September/October
TAKE FREE
NO.49

茨木のり子が愛した美しい庄内の風景、
夫を愛する彼女の気持ちや詩の世界に
ほんの少し寄り添えたような気がしました。

庄内の風景 紺野美沙子

「鶴岡で朗読会をしていただけませんか」。茨木のり子六月の会の方から問い合わせをいただいたのは、2015年の秋。すぐに日程調整へと進んだものの、なかなかタイミングが合わず、今年6月やっと実現しました。鶴岡は前々から訪れたかった場所、茨木のり子が愛した庄内の風景を見てみたいとずっと思っていましたので、念願が叶いとても嬉しかったです。豊かな緑の大地を機上から眺めつつ空港に到着。まず観光タクシーで向かった先は、茨木のり子の菩提寺である浄禅寺。まさに「お経」の詩の通り「日本海に面した海のみえる寺 子供の頃からあなたの慣れしたしんだ寺」。高台から見える茨木のり子が愛した美しい庄内の風景、夫を愛する彼女の気持ちや詩の世界にほんの少し寄り添えたような気がしました。次に訪れたのは「加茂水族館」。

多様なクラゲの世界に圧倒されつつも、幻想的な水槽に囲まれて日頃の喧騒を忘れ、穏やかなひとときを過ごすことができました。そして生まれて初めて「ウミネコのエサやり」にも挑戦。頭上で器用にホバリングするウミネコたちに小魚を投げると見事にキャッチ、庄内浜に暮らす小さな仲間との楽しい交流でした。

鶴岡は数々の文豪を輩出した文化の街。赤い丸屋根の洋風建築が素晴らしい「大宝館」では、鶴岡が生んだ先人たちの貴重な資料を拝見しました。私は高山樗牛の「己の立てるところを深く掘れ。そこに必ず泉あらむ」という名言が好きで心の支えにしています。驚いたことに館内には樗牛の「生誕の間」が移設復元されていたのです。タイムスリップしたようなその空間に身を置き、不思議なご縁に感謝しました。

水が豊かで気候に恵まれ、米作りにも適している庄内平野、目に映るすべての風景は美しく懐かしい。そんなのどかな風景の中に、慶應義塾大学の先端生命科学研究所という立派な研究施設があることにも興味をひかれました。歴史や文化だけではなく、未来につながる知の探究の場が混在するところもまたこの街の魅力なのかもしれません。

初めて庄内地方を訪れ、いろいろな発見がありました。「だだちや豆」の「だだちや」の意味を地元の方に教えていただいたことも私にとっては大発見です。まさか「お父さんの豆」だとは…。今回の公演で、庄内とのご縁ができてとても嬉しいです。またゆっくり訪れたいと思います。



茨木のり子 六月の会 2018 朗読座公演「茨木のり子～夫を恋う詩～」(6月23日、鶴岡市中央公民館)
写真提供=茨木のり子 六月の会

こんの・みさこ／俳優。東京生まれ。1980年慶應義塾大学在学中にNHK連続テレビ小説「虹を織る」のヒロイン役で人気を博す。『武田信玄』『あすか』など多数のドラマに出演。舞台『細雪』では三女・雪子役を好演。他に『オットー』と呼ばれる日本人『木下順二』作、『きんぎょの夢』(向田邦子原作、『日本の面影』山田太一)など、硬軟を問わず意欲的に舞台に取り組んでいる。1998年、国連開発計画親善大使の任命を受け、アジア・アフリカほか各国を視察するなど、国際協力の分野でも活動中。2010年秋から「紺野美沙子の朗読座」を主宰。さまざまなジャンルのアートと朗読を組み合わせたパフォーマンスを全国各地で公演している。

【参考資料】致道博物館「庄内の民具」、犬塚幹士著『庄内のくらしと民具』致道博物館、山形新聞社「やまがたの文化遺産」(平成3年) 渡辺幸任著「何でも背負えるバンドリ」庄内民俗第35号(平成22年5月30日発行)

【協 力】公益財団法人致道博物館、渡辺幸任(庄内民俗学会委員)



芹沢銈介「ばんどり図」屏風(四曲 絹)
177.0×246.0cm 1957年
千葉県柏市教育委員会所蔵

丸ばんどり、ころばんどり、しとばんどり、羽根ばんどり、さまざまな形状に見事な意匠を施した庄内地方のばんどりは、農林漁業の荷物を運ぶ際の背中当てとしてかつて庄内の人々の暮らしを支えていました。これほどまでに芸術性の高いワラ細工は、なぜ生まれ、どのように作られて、生活の中で使われてきたのでしょうか。今に受け継がれている姿から、“庄内のばんどり”を追ってみました。

特集 Special Edition 庄内 の ば ん ど り

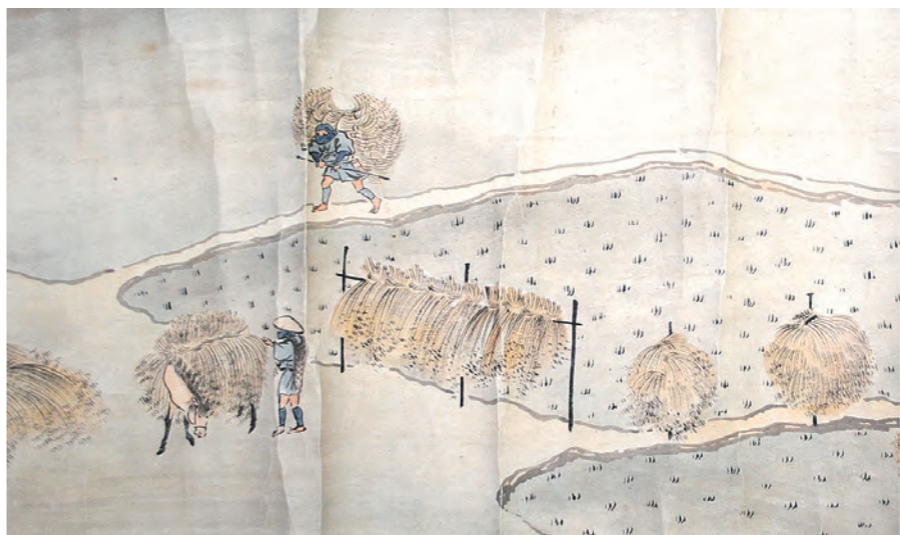
稲や米俵を運ぶ時や、山から木炭や木を運ぶ時、山越えの交易運搬など、ばんどりは農村、山村、漁村と、かつては広く庄内一円で使用されていました。しかし時代の変遷によって運搬の方法が変わり、ばんどりの使い手も激減。そんな中でも、ばんどりを使い続けてきた人たちがいました。

ばんどりを使う

特集 庄内の ばんどり



江戸時代後期の庄内の絵図より。よく見ると、稲ワラを運ぶ人の背中にばんどりが描かれている。「大泉四季農業図」(致道博物館蔵)



立谷沢川の上流、庄内町立谷沢瀬場に住む辻一彰^{かずあき}さんは、林業に従事しつつ、6月から7月中旬までの期間は月山8合目にあるタケノコ山で



(上)昭和40年代、月山の行者返しを登る強力たち。撮影は月山頂上小屋の芳賀竹志さん。(下)昭和46年、弥陀ヶ原から月山山頂に荷揚げする強力の太田昭さん。どちらも渡辺幸任著「出羽三山絵日記」より。

毎年月山筍を採っています。月山筍を卸す先は、羽黒山の門前町である羽黒町手向^{てうけ}。宿坊が参拝者に精進料理として提供するからです。「羽黒山を挟んだ立谷沢と手向は、何百年も前から月山筍など物流を介してつながってきた地域です。ばんどりは山で月山筍を採る時に使われてきました。一度に一人が背負う重量がだいたい40〜50kg。そのくらいの重さになると他の背負子^{せうご}では運べなくて」。

荷縄で荷物をまとめ、ばんどりを背中に当てて背負い縄で背負う。すると背中がしっかりと守られるため、形や重さを選ばずどんなものでも運ぶことができました。「ばんどりを使って、荷物の重心がうまく背中にくるようにするコツを、この辺では『りんかかろ』と言いますが、そうやって月山の山頂に酒樽や風呂桶や布団などを荷揚げしたのが『強力』^{こうりき}と呼ばれる人たちです。ただ、立谷

沢では強力以外の人たちも使っていました。男性も女性も一人ひとつばんどりです。山間の田んぼから稲ワラを運ぶ時や奥山から炭を運ぶ時、米俵を運ぶ出す時など、ばんどりは立谷沢のあらゆる生活を支えてきました。そのためどの家の車庫や蔵にも壁にかけてあったとか。そんな辻さんが、ばんどりを自ら使うようになったのは、高校を卒業し、月山筍採りに加わった平成の初め頃でした。父親の稔^{とよ}さんが採った分も合わせておよそ60kg背負っていた辻さんに、周りの先輩たちがばんどりを勧めたのです。「この頃はまだまだみな使っていましたからね。私は最初祖父が残したものを使っていました。すぐに駄目に

「ばんどりを使いこなすには相当な荷造りの技が必要で、私も時間をかけて習得してきました。なので、月山のタケノコ山を守り育てる人自体がいなくなってきた今、新たな使い手が現れることはもうないのでないかと思っています」。重い荷物を受け止め続けてきた辻さんのばんどりが、次の出番を待つかのように、その風格を示していました。

羽黒山菜組合副組合長

辻一彰^{かずあき}さん

昭和47年、庄内町立谷沢生まれ。現在は立谷沢の人々が守り育ててきたタケノコ山をすべて1人で管理している。写真は立谷沢川溪谷にて。愛用のばんどりで荷物を背負う。

辻さん愛用のばんどり。背中側はガマ(蒲)でクッション性を高め、表面は山ブドウの木の皮の編み込みで強度を高めている。使い込むほどに体に馴染んで使いやすくなるという。



なったので、古いばんどりをハサミで分解しながら独学で自分の体に合わせて作りました。使う人の体型に合わせてないと重い荷物を背負えませんか」。しかしその後、ばんどりを使う人たちが高齢で亡くなったたり引退したりする中で、ついに使い手は辻さん一人になりました。庄内一円をみても、恐らく自分が最後ではないかと話します。

ばんどりはこの地域とともに歴史を歩んできた生活用具でした。



ばんどりを作る

時代の変遷によって生活用具としてのばんどりが姿を消しつつある今、庄内のワラ細工文化の伝承という立場から、ばんどりを作っている人がいます。ちよつと取材に伺った日は、ばんどりに魅せられた県外の若者が、技を習得するために匠の家を訪れた日。ばんどり作りにも励むお二人にお話を伺いました。

7月終わりの夏真っ盛りの日。庄内有数の米どころ、鶴岡市藤島地区の長沼で作り方を教えているのは齋藤榮市さんです。齋藤さんがばんどりを作り始めたのは約10年前。ばん

どりの調査に訪れたいという東京農工大学の学生たちを、齋藤さんたち地域の藁細工研究会が受け入れることになった時でした。「ばんどりはこの辺りでも米俵を山居倉庫に運ぶ



ばんどりの作り方を
頭さ入れれば
ワラ細工仕事の8割を
覚えたも同然だの。

藁工芸 齋藤 榮市さん

昭和10年生まれ。鶴岡市藤島町在住。自ら所有する田んぼで材料を確保しながら、ワラ細工を作っている。普段はしめ縄や草履が中心。

時に使っていたらしいけど、そんなに残っているわけではなくての。受け入れるために研究会で講習会を開いて、前会長から作り方を教えてもらった。でも前会長ははじめの時に一緒に覚えた人はみんな亡くなってしまった。今は習いたい人がいれば自分がこうして教えてん。

「榮市さんがよく、ばんどりが作ればどんなワラ細工でも作れるって言うんです。本当にそうだと思います。今は榮市さんの技を学ぶのが目的だけど、いずれは自分のデザインでも作りたいし、この技を取り入れた現代アートの立体作品を作っていたらと思っています」。

本当は地域の中に作り手が出てくれば、とつぶやく齋藤さんと柿沼さん。ばんどりを残したいという共通の思いを胸に抱く2人は、まるで本当のおじいちゃんとお孫さんのように仲睦まじく作業をしていました。



アーティスト 柿沼 千里さん

平成3年生まれ。埼玉県出身。ワラ細工の技を取り入れた美術表現を目指し、新潟県糸魚川市でワラ細工に関わる仕事をしながら毎年齋藤さんのもとに技を習いに来ている。

生時代に訪れた世界の民芸品の展覧会でした。「どの国の民具かわからず、でもかっこいいと思った」のが、庄内のばんどりであることに大きな衝撃を受けた柿沼さんは、とある旅行会社の企画の中にもばんどり作りツアーを発見し、参加。それが齋藤さんとの出会いにもなりました。

を初めて知ったのは、美大



毎年この時期に2泊3日で習いに来る柿沼さん。縄ない、しめ縄を覚え、今年からばんどり作りに入ったそう。

ばんどりの 作り方

特集 庄内の ばんどり



材料の準備
ワラ細工専用の田んぼを夏に青田刈りし、材料を確保します。



床作り1
ばんどりの土台となる床をワラを継ぎ足しながら作ります。



床作り2
U字型の土台に、いぐさを巻いてクッション性を高めます。



肩掛け作り
肩掛け部分の芯縄を伸ばし、布を編み込んで肩掛けを作ります。



くもの巣編み
荷物が当たる表面にくもの巣編みを施し、強度を高めます。



羽根作り
祝いばんどり用の羽根を作り、肩掛け部分に取り付けます。



仕上げ
すべり止め用の綱や飾りを取り付けたら、祝いばんどりの出来上がりです。



Bandori Collection

庄内のばんどり
コレクション

鶴岡市の致道博物館では
200点近くのばんどりを収集・収蔵し、
その一部を常設展示しています。
そのうち116点が国の
有形民俗文化財に指定。
機能美に優れたばんどりを
種類ごとにご紹介します。

特集 庄内の ばんどり



民衆が創った実用の芸術 庄内の民具「ばんどり」

庄内のばんどりのような荷背負いの運搬用具は各地に見られます。『庄内方言辞典』には「ばんどり」は動物の「ムササビ」の別名とあり、形が似ていることに由来すると考えられますが、一方で、富山や岐阜、石川県などの北陸地方ではミノのことをばんどりというなど、こうしたワラ細工の地方名はさまざまです。

致道博物館のばんどりコレクションは、開館当初から大塚幹士さん（現顧問）を中心に収集、調査が続けられてきました。昭和39年に文化財に指定された116点はどれも見事な意匠で、全国的にも優れた資料とされています。それらは主に農家で使われていたものが多く、庄内平野の発達した米づくりによって、比較的豊かな地域だったことが創造性豊かなばんどりを生んだ理由の一つと考えられています。

ばんどりの 部分名称



▲丸ばんどり

甲が円形や楕円形で、亀の甲羅に似ていることから「ころ」（甲羅 ばんどり）とも。どのばんどりも、土台に蛇の目やくもの巣、亀甲などの編み模様をつけるのは補強と荷物のずれ落ち防止、空荷の時の装飾のため。

▲ねこばんどり

「ねこ」とは、ワラや縄で編んだ筵や背負い袋のこと。筵を編むようにワラの束を「こも編み」にしたねこばんどりは、薄手で丈が長いのが特徴。表面に出たワラの編み端が荷物のクッションの役割をします。

Bandori Collection

※致道博物館の「庄内のぼんどりコレクション」は、館内の重要有形民俗文化財収蔵庫で常時30点余を展示しています。

📷 = 写真提供：致道博物館



背負運搬というきびしい労働をささえたぼんどりには、こうした手仕事の美しさが、用具としての堅牢さと機能の中に見事に表現されている。晴れの日为民具には、素朴な、ささやかな美しさへの願いがこめられているようである――。

致道博物館「庄内の民具」より



丸や角のぼんどりに、鳥の羽根のような肩当てがついたぼんどり。「祝いぼんどり」として、婚礼の時、嫁入り道具を運ぶ際に用いられ、色布や色糸、染めた縄などをさまざまな模様で編みこんで多彩なデザインに仕上げられています。祝いぼんどりは、嫁ぐ娘へと父親が何日もかけて作り、また、婿が花嫁のために編んだもの。日々の暮らしの人とモノへの思いやりが込められた、この地域の人と風土を表す民具です。

▲羽根ぼんどり



嫁入り道具を運搬する「ニショイワカゼ(荷背負い若勢)」が先頭に立つ嫁入行列(致道博物館)



▲しとぼんどり
「しと」は、ワラの束を縦に並べて編んだ敷物のことで、馬具の鞍の下や土間の下に敷くゴザなどにこの呼称を使う地域も。庄内浜の砂丘の集落でよく用いられ、角型に編まれているのは、魚箱を背負って運ぶのに都合が良かったため。

特集 庄内のぼんどり





庄内写真真季行

33

鶴岡市羽黒町・創造の森

木漏れ日が差し込む森の中で
おばあちゃんの味を記録する。
それが私の恒例行事。

収穫したての庄内柿を小脇に抱え、
畑から森の中へ進む。私にとって柿は
大好きなおばあちゃんの味のひとつ。
秋一番に採れた柿をお気に入りの場所
で撮影するのがここ数年のお約束で、
この日も森に差し込む木漏れ日を借り

て、「おばあちゃんの味」を記録した。
渋抜きした食べ頃のみずみずしくてあ
ま〜い柿は、大げさに言えば匠の技だ。
今年もおいしい柿ができたよ、と心
の中で呟きながら、まあ〜るく実った
秋の味覚を大切に味わった。



東北銘醸の 初孫 伝承生酏

今年5月に山形市で開催された
インターナショナル・ワイン・チャレンジ (IWC) で
6つの金メダルを獲得した東北銘醸
中でも伝承生酏は、堂々の部門第1位!

日本酒を造るには酵母の力が不可欠だ。そして酵母を育てるには乳酸菌の力が不可欠だ。現代は添加物の乳酸を使う酒蔵がほとんどだが、かつては空気中の自然な乳酸菌を使う「生酏」造りが当たり前だった。今年5月に山形市で開催された世界最大規模のワイン品評会「IWC」で、本醸造部門最高位のトロフィー賞に輝いた「初孫伝承生酏」は、その希少な生酏造りのお酒である。

製造元の東北銘醸は酒田市にある明治26年創業の酒蔵だ。効率化や製造期間の短縮を求めて全国の酒蔵が添加物の乳酸を使う「速醸酏」で造るようになってからも、東北銘醸は時間も手間もその倍かかる生酏造りに一貫してこだわってきた。そんな蔵元が「伝承生酏」を発売したのは平成10年。おでんなどに合う普段使いのお酒として売り出した。お勧めの飲み方はお燗である。だが一方で数年前からヨーロッパでは、冷で飲む評価が高いとの話を聞くようになっていた。それならと試しに「IWC」に出品してみた。この快挙である。

評価のポイントには、生酏造りならではの深い味わいと、うま味の中にあるワインのようなまろやかな酸味だ。12℃くらいに冷やすと酸味が際立ち、西洋料理にピッタリなのだという。そのため今回の受賞を機に、イタリア、イギリス、ドイツへの輸出の話が浮上した。日本の伝統製法にこだわった庶民のお酒が、世界への階段を一気に登り始めたのである。ちなみに、20年にわたって「伝承生酏」を育ててきた杜氏いわく、お燗はお燗で酸味が穏やかになって抜群のコクが出るという。うん、始まりは「おでんに合うお酒」だもんね。



「伝承生酏」の他に東北銘醸が5月のIWCに出品したのは「港月」「出羽の里」「いなほ★生詰」「雪女神」「純米大古酒」の5銘柄。すべてが各カテゴリーで金メダルを獲得しました。また1つの蔵でこれほど多くの金メダルを受賞したのは史上初だったため、7月には年間最優秀酒蔵も獲得しました。

<http://www.hatsumago.co.jp/>
東北銘醸株式会社 ☎ 0234-31-1515
(取材・文 長谷川結)



三崎山からの眺め

庄内俳句紀行

釣鐘人參揺れる
三崎山を歩く

雨上がりの朝はすべての
景の色と形が際立って見える。
海の色もまたいつにも増して
碧く空を区切っていた。

季語
釣鐘人參

つりがねじんじん
ととき・沙參(しゃじん)。
初秋に咲く淡い紫色の釣
鐘型の花。

三崎山は鳥海山の西の裾野が海に垂れ
込む山形県遊佐町と秋田県にかほ市の県
境に位置する。羽州浜街道の古くからの
難所の一つであり、手長足長という妖怪
の伝説にある「有耶無耶の関」という関
所があった。国道沿いの駐車場の「奥の
細道」案内看板の脇から古道に入ると、
細く急な坂「駒泣かせ」が現れる。

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

―芭蕉

のように美しく、木の葉越しに見える水
平線は限りなく青かった。

水引や風が弔ふ古戦場

―あへ小萩

タブ林内の開けた場所にたどりつくと、
慈覚大師の創建と伝わる大師堂が現れる。
周りには古びた五輪塔がいくつか建って
いた。ここにはもう一つの歴史がある。
幕末の慶応4年(1868)、三崎山は戊
辰戦争の激戦地となった。供養塔や顕彰
碑が、150年の歳月を弔いひっそりと
佇む。

新涼の沖に一線ひいて藍

―水内慶太

古道をさらに進むと、一里塚跡、そし
て秋田県側の公園に出る。目の前には紺
碧の海が広がり、間近に飛鳥、そして遠
くに男鹿半島を望む。帰りは海沿いの遊
歩道に戻ると、眼下には鳥海山の溶岩流
が海に流れ込み、長い時間を経て波に浸
食され断崖となった観音崎、大師崎、不
動崎という3つの岬を望む。

立ちどまることは後退道をしへ

―上田五千石

煌めく海はまさに銀海、岩の上に釣り
人が見える。足元で一匹の道おしえが、
こちらが近づくと前へと跳ね、立ち止ま
るとくるりと振り返る。岬をわたる風が
釣鐘人參を揺らし、鮮やかな色の葛の花
が散り始めていた。芭蕉もこの碧海を
きつと見たに違いない。

歴史を紐解きながら歩くと、今までと
は違った景色が見えてくる。人の世の哀
歓が、この地の風土を織りなしてきたの
だろう。日差しはまだ強いが、すでに花
たちはわずかな秋を感じ始めていた。振
り返った古道の木下闇から水引が優しく
見送ってくれた。



葛の蔓と銀海



木下闇



大師崎の断崖



釣鐘人參